

二千年を迎えて

笹川通博

1. ゴミについて

ゴミの散乱が気になる。道路、駅、公園、ベンチの横、木の下。紙、カン、タバコ、包装、容器、ビニール類。よく、若者が悪者にされる。確かに、若者も平気でゴミを投げ捨てる。しかし、年配の人も結構捨てている。タバコを一本取り出し、空になった箱をねじり、平気な顔で川へ投げ捨てる白髪混じりの男性。車の灰皿の吸い殻を道路にあけるネクタイ姿の紳士。列車の中で飲み食いした空容器を座席の下に置く女性。読んだ週刊誌を座席に置いたまま列車を降りるサラリーマン。若者もだらしがないが、社会経験を積んだ人も結構いい加減である。自分の顔や姿、格好はきれいにしたがる人が、不思議とゴミに囲まれて暮らしている。

悪いのは捨てる人、と言ってしまえばそれまでだが、私は別の見方もあることに気づいた。そもそも、ゴミを投げ捨てることは本当に悪いのか。昔の人はどうだったのだろう。ここまで現代人にゴミを投げ捨てる習慣が身に付いているので、昔の人も、一部の徳のある人を除いては、当然のようにゴミを投げ捨てていたのではなからうか。いや、はじめからゴミになるような物はほとんどなかったのかもしれない。昔の物は、たとえゴミとして捨てても、多くは自然に土にかえり、かえって植物の栄養にでもなったのではないか。物を包むにしても、葉っぱや竹の皮を使っただろう。食器や料理器具、家具などの焼き物や金属は、長い間大切に使われただろう。紙だって貴重だったはずだ。

とすると、ゴミを投げ捨てる人が悪いのではなく、捨てても土にかえらないゴミの方が悪い。また、地面を被ってゴミを土にかえられなくしているアスファルトやコンクリートが悪い。あるいは、ゴミになるほど多くの物のあることが悪い。どうしてもゴミを投げ捨てる習慣が直らないのなら、品物の材料や街の構造物を土にかえる有機的な物にすればよい。あるいは、根本的に物の量を減らせばよい。土にかえらない物、有害物質の発生する物を多く使いたいのなら、そしてそれらが生活に必要な不可欠ならば、そのゴミを処理できることが前提条件である。人ではなく、文明の倫理を問うべきである。

2. 「悔い改めよ!」「いやだ!」

昨年、新潟市民芸術文化会館の劇場で、モーツァルトの歌劇「ドン・ジョバンニ」を観た。といっても海外のプロ

が来たのではなく、日本人の県内外の有志が集まっての公演であった。一部声がかすれたりしたが、一生懸命さが伝わってきてかえってよかった。私の鑑賞力不足かもしれないが、なまじプロのきれいな公演よりも、かえってアマの方に感動する場合がある。感動は完成度に比例するとは限らない。新潟市民芸術文化会館(りゅーとぴあ)は、建設される時はいろいろと反対もあったようだが、やはり造ってよかったと思う。

さて、その「ドン・ジョバンニ」だが、初めて観たこともあって、大変衝撃を受けた。話のあらすじは、女好きの貴族、ドン・ジョバンニが、女がらみで騎士長を殺す。それでも彼は女遊びをやめない。殺された騎士長は人々から尊敬されていた人物で、石像が造られる。その騎士長の石像が動き出し、遂にドン・ジョバンニを地獄へ引きずり込む。一度聞けば耳について離れない美しい音楽、「奥様お手をどうぞ(主人公が女を踊りに誘う歌)」や「カタログの歌(手をつけた女のカタログを主人公の従者が歌う)」に彩られ、悪役の主人公がいなくなってめでたしめでたしの喜劇である。しかし、主人公を地獄に引きずり込む石像、あるいは亡霊の正体が、全く明らかにされない。喜劇なのだから、本当は誰かが仕組んだとか、実は騎士長は生きていたとか、たね明かしがあってもよさそうなものがある。それが、全くない。主人公が地獄に墮ちる場面では、観客は劇であることを忘れ、身動きもできず、黒々とした恐怖にさえ襲われる。モーツァルトはおそらく、当時の貴族を風刺したのだろう。あるいは、映画「アマデウス」にあったように、亡き父への畏敬を騎士長に重ねたのかもしれない。

名作というのは様々な解釈が可能であり、それがまた傑作の条件でもあると思う。この歌劇についても、表面的でない解釈が可能である。その代表的なものは、ドン・ジョバンニを自由な精神の持ち主として賞賛することである。しかし、私はそうは捉えなかった。手当たり次第女を口説きまわり、それでもこれは愛だと言ってはばからないドン・ジョバンニ。そこに私は、資本力に任せて欲望のすべてをかなえようとする現代人を見たのだ。地球上の、更には宇宙の、あらゆるものを手に入れようとし、それを愛だと言ってはばからないのは、他ならない私たち自身ではないのか。ドン・ジョバンニは騎士長の石像に引きずり込まれる。石像は言う。「悔い改めよ!」ドン・ジョバンニは答える。自らの尊厳をかけて。「いやだ!」全く謎の明ら

かにされていない地獄に、本当に堕ちるのだ。

3. 二十一世紀を担う子供たちへ？

来年はいよいよ二十一世紀である。テレビでは二十一世紀に向けて、様々な番組が企画されていた。明るい夢を語るものもあった。宇宙開発、情報化、コンピュータやロボットの発達、医学や生物学の進歩。しかし、明るい話は荒唐無稽に思えた。現実的な番組もあった。現実的なものイコール暗い、というもの悲しいが、あまり明るい気分になれないのも事実だ。環境破壊、人口の激増、食糧危機、貧富の差、高齢化。戦争、民族間、宗教間の争い。医学や工学は発達するが、その恩恵を受けるのは一部の豊かな人だけ。その豊かな国での教育、精神の荒廃。食物や品物は豊富だが、体も心も病んでしまうという不思議。そうした問題を挙げた後で、テレビの中の人物は言うのだ。これらの問題の解決は、二十一世紀を担う子供たちに託されているのだと。

でも、それってちょっと変じゃないの？まだ幼い、あるいは生まれてもない子供たちが、どうして自分で播いてもない問題の解決を迫られるのか。何も知らずに生ま

れてきた子供たちは、先代、つまり私たちが恨むであろう。問題を起こした私たち自身が、責任を持って、解決しなくてはいけないはずなのだ。しかし、確かに、それはできない。昔の戦争の影を、戦後生まれの僕たちが引きずっていかなくてはならないように。一体、僕たちが、あるいは子供たちが、何をしたというのだろうか。私たちが起こしている問題は、二重の意味で犯罪である。一つは、今、現に犯している罪。もう一つは、その責任を当事者ではない次の世代に押しつけるという罪。

奇抜な格好や言葉遣いをし、車や携帯電話を駆使しながら、自分の一番大切なことは楽しく生きることだと平然と言う若者たち。しかし、彼らの生活は、実は私たちが長年求めてきたものではないだろうか。自由、平等、平和、愛、快樂、新奇さ、お金、時間、科学文明の恩恵を、私たちは追い求めてきた。彼らは確かに、私たちの子供なのである。こんなはずではなかった、と思う。今、私たちの夢や希望が問い直されている。進んでいると思っていたことが遅れており、遅れていると思っていたことが進んでいる。二十一世紀を間近にして、進歩、発展という言葉が意味をなさなくなっていると思う。

各地から届いた 2000 年年賀状より

美しい自然を守り美しい花に心を学び花を作ります。

北魚沼 T. Z

白鳥が飛来する環境を保ち、そんな田圃で安全な米をつくり続けたい。

三島郡 N. S

昨年、長男が通う小学校近くの休耕田の植物を採集してみて、植物相が豊富なことに少々驚きました。

上越市 H. S

佐潟周辺の畑作について、方向を見出して行かねばならないと思っています。

新潟市 T. Y

相変わらず湿原植生を中心に、植物社会学的な立場から調査を続けています。しかし、以前調査した湿地に再調査に出かけると、多くは消滅したり、植生が変化したりしており、残念です。小千谷市 S. K

昨年は念願の日高山系に行く機会に恵まれ、何度か足を踏み入れました。山塊の深さ、広さ、さらには植物相の豊富な事などなど、とても言葉で言い尽くせない感激を満喫、充実した年を送ることができました。

北海道 S. H